

第8回青森県地方分権推進シンポジウム

トークセッション ～地域の活性化にどう取り組むか～

月日：平成23年2月8日（火）

場所：青森国際ホテル 萬葉の間

進行：城本 勝氏（NHK報道局 記者主幹）

参加者： 碓 一寿氏（興部町長）

渋谷 拓弥氏（NPO法人ECOリパブリック白神 理事長）

若菜 千穂氏（NPO法人いわて地域づくり支援センター 常務理事）

佐々木 久美子氏（NPO法人メリーゴーランド 理事長）

●司会者

トークセッションを開始いたします。

ご出演の皆様をご紹介申し上げます。

コーディネーターをお務めいただきます、NHK報道局記者主幹 城本勝様でございます。

続いて、パネリストの皆様をご紹介させていただきます。

皆様より向かって左手より、興部町長の碓一寿様でございます。北海道興部町よりお越しいただきました。

NPO法人ECOリパブリック白神理事長 渋谷拓弥様でございます。弘前市よりお越しいただきました。

NPO法人いわて地域づくり支援センター常務理事 若菜千穂様でございます。岩手県花巻市よりお越しいただきました。

NPO法人メリーゴーランド理事長 佐々木久美子様でございます。秋田県能代市よりお越しいただきました。

なお、プロフィールにつきましては、皆様、お手元のプログラムをどうぞご覧ください。

それでは、これより進行はコーディネーターの城本様をお願いいたします。

●城本氏

NHKの城本と申します。

今日、このコーディネーターを務めさせていただくことになりました。

私はNHKでずっと政治記者をしていたんですが、その後、解説委員という仕事を、去年の夏までしておりました。去年の夏から、解説委員からNHKの報道局の方にかわりまして、今、いろんな報道関係の仕事をしているんですが、地方分権の問題についても取材をし、報道してきたということで、本日、司会をして欲しいというご依頼がありましたので、お受けしたということでもあります。

さっきの西尾先生のお話にもありましたが、今、地方分権改革というものが、西尾先生は触れませんでしたでしたが、国政のレベルでいいますと、民主党政権になりまして、「地域主権」という言葉にかわりましたけども、これは改革の一丁目一番地だというふうに言われていたわけですが、どうもその後の展開を見ていますと、様々な政治状況の中で改革が足踏みをしているという印象を持たれている方も多いと思います。

ただ、これも西尾先生のお話にありましたが、そうは言っても具体的に改革が少しずつかみ切れませんが、前に進んでいるということで、先ほどの講演では、その成果を活用せよという、今日は自治体の関係者の方も多いようですが、皆さん方に対する叱咤激励というふうにも聞こえました。

ここでは、その改革の成果を活用するために、一体どうしていけばいいのかという観点で話を深められればと思っております。

タイトルを「地域の活性化にどう取り組んでいくのか」というふうにさせていただきましたが、地方分権といっても、よく聞かれるのは、具体的にどういう改革なのか分かりにくいと。権限や財源を国から地方、地方といっても都道府県もあれば市町村という基礎自治体もあるわけですが、移すのだと、自由を高めるんだと言われてますが、我々メディアもその責任の一端はあって思っていますが、なかなか具体的なイメージがつかめないというのが一般的な受け止めだと思えます。

私なりにその意味を解釈すると、やっぱり地域の住民といいますか、地域の方々がより暮らしやすい豊かな生活を送っていくためにどうするのかと。言い換えれば、その地域をどう活性化させていくのかと。そのための手段が分権であるというふうに言っているのではないかと思っております。

そういう意味でも、今日は北海道興部町長はじめ、地元青森、秋田、岩手それぞれの地域で具体的に様々な活動に取り組んでおられる皆さんに出席していただいていますので、そうした地域の現場、現場の中でそういう活性化、すなわち、人々の暮らしをよくするための取組み、そのために何が必要なのかといったお話をさせていただければと思っております。

では早速ですが、まずパネラーの皆さんに自己紹介も兼ねまして、普段のお仕事、活動の中で、今言いましたような分権あるいは地域の活性化といったことについて、どういうふうなことをお感じになっているのか。国や行政機関に対する注文でも結構ですし、いろんな日頃感じている課題、あるいはこういうふうな方法がいいなということがあれば、それも含めてお話いただければと思えます。

大変恐縮ですが、時間の関係もありますので、お一人5分程度で、まずはお話していただければと思っております。

それでは、席の順番に、興部の町長でいらっしゃいます碓さんからお願いします。

●碓氏

ただ今ご紹介いただきました、北海道はオホーツク海側、ちょうど今、流氷が接岸している地域であります、人口 4,300 人ほどの小さな町でありまして、酪農と漁業がホタテでございます、青森の商売敵でございます、その町から参りました、町長の裕と申します。どうぞよろしく願い申し上げます。

私は、実は酪農家でございます、今も牛を飼っております。平成 11 年に町議会議員に生まれて、いろいろまちづくりで町長と喧々諤々やっております、一期目で、もうこれ以上、この人に言ってもしょうがないなと思って議員を辞めようと思ったんですが、丁度、夕張ほどではないんですが、うちの町が年間 40 億の一般会計でございますが、その約 3 倍、120 億を超える起債残高がございます、予算が組めなくなると。ちょうど、平成 15 年というのは、地方分権の関係で交付税を大幅に削減するという時でございます。20%ぐらい削減するという時でございますので、予算が組めなくなったというようなこともございまして、何となくしょうがないなということで、45 歳でございましたが町長にいたしました。

その時に思いましたのは、当時の助役と選挙をいたしまして、とにかくどっちが勝っても町民の人が「うちの町はお金がないんだ」ということを理解してもらわなきゃならないということで、最低 3 人から多い時では 50 人ぐらいの懇談会にびっしり足を運びまして、とにかく何か気楽に選挙をやしまして、周りの人は大変だったと思いますが、勝ってしまいました。

その後、私は 10 年で 120 億を 60 億にするということを公約いたしまして、自らの給与もちょうど 1 年分カット。職員も管理職であれば 100 万円以上のカットと、毎年ですね。ということ「3 年間辛抱してくれ」ということで、3 年間辛抱していただいて、町民にも「自治会制度の自主的な運営をしてくれ」ということでお願いをいたしまして、お陰様で、ちょうど今年統一地方選でございますが、8 年でほぼ達成をいたしました。職員の給与も 3 年後に戻す形ができました。

私は、それほど地方分権うんぬんということをあまり強く意識したつもりはございません。とにかく、一人前の町にしたい。道や道の出先機関から財政で、皆さん、ご存知かどうか分かりませんが、1 年間の公債費負担比率が 25%を超えたら、もうこれはストップであります。18%を超えても、一応、ご相談をしなければいけないんです。許可が、青森であれば県の許可がないと起債、借金ができないというのが、今の現実であります。銀行と皆さんの、一般の方の商売と全く同じであります。私が町長になった頃は、まだございませんでしたが、今はそういう“たが”をはめられました。それを少し先取りをしてやったということで、今、何とか、町が一人前の町になったかなと。毎年、基金も積めるようになりましたので、なったかなと思っております。

ただ問題は、地域に仕事がないわけでありまして。なんぼ理屈を言っても、権限だ、うんぬんと言っても、やはり明日の生活がなければ、町はつくっていけないわけでありまして。それをどういうふうにつくっていくかということが、一番大きな問題です。

北海道では、私達の町もそうですが、木材業で栄えました。木材が衰退し、これはいわゆる今のTPPと同じ関税の撤廃、輸入材で負けたんであります。そして木材業が衰退し、建設業が盛んになり、それが今衰退し、農業・漁業に頼らざるを得ないという現状であります。そういう中で、私は、その農業から新しい形が出来ないかなということも、今、検討しております。

もう1つは、私が平成15年の5月1日に町長になった時に、5月2日の日、次の日ではありますが、保健所から言われたことがございます。うちの町に国保病院がございまして、その病院の取り消しであります。というのは何故かということ、名義借りをしていたのであります。療養型、介護型病床群のいわゆるお医者さんの名義借りを当時、北海道で第一号の取り消し認定病院となりました。あまり良いことではございません。しかし、町長になって2日目に病院取り消しだって保健所から言われた時のそのショックは、大変なものであります。

それからずっとお医者さん探しをやっております。全国も歩きました。今、何とか維持をしておりますが、青森県もそうだと思いますが、この医療という問題も地方分権と切って離せない問題であります。なかなか解決出来ない問題であります。これをやはり今、一生懸命取り組んでいるところであります。

それで、分権の捉え方ということではありますが、私が今、8年首長をやりまして非常に思っているのは、私達の仕事というのは、究極的にですよ、住民の生命・身体・財産、これを守ることです。当然、国も国家間で我々の命を守ることではありますが、いざ災害が起きた時、いざ何か起きた時に、今、申し上げた3点を守ることが町長の最大の仕事でございます。

じゃ、そこで分権がどうかと言いますと、どうも先ほどの西尾先生のお話を聞いておりましたが、8年間町長をやっておりましたが、お互い都合の良いこと、国は金がないから権限だけやると。地方は金もないから、権限は要らないけどお金だけ欲しいと。これのずっとぶつかり合いでございました。挙句の果てに市町村合併で一番数が減ったのは、町村であります。その辺が、私は、一体何のための分権改革なのかな？ということをお問自答しております。先ほどの西尾先生のお話を伺いまして、私も間もなく選挙ではありますが、つくづく町長の仕事というのは、段々大変になるなというふうに、今、少し落ち込んでいます。今、そういうことを考えております。

●城本氏

ありがとうございます。

人口4,000人ぐらいでしたか。小規模自治体ということでしょうけども、現実問題、大変だと思います。また後ほど、その辺のお話を伺いたいと思います。

続いて、渋谷さん、お願いします。

● 渋谷氏

皆さん、こんにちは。

NPO法人ECOリパブリック白神の理事長をやっております渋谷拓弥と申します。今日のパネラーの皆様は北海道、秋田、岩手、青森の4県の代表というお立場でご出席いただいていますので、私も青森県を代表して頑張りたいと思います。実を申しますと私の父は、NHKのローカル局で津軽弁研家としての川柳の番組をやっている渋谷伯龍と申しまして、青森県の方々には多少ご周知いただいているかもしれませんが、私は父ほど津軽弁が上手くありませんので、青森県を代表して津軽弁でお話し出来るか多少不安ですが、どうぞ宜しくお願いいたします。

まずもって各県からこの寒い青森までおこしいただきありがとうございます。ここ数日雪の日が続きましたので、足元も悪い中ではありますが、東北・北海道の皆様には取りこし苦労といったところでしょう。青森県は現在、東北新幹線全線開業に沸いていますけれども、青森県が寒いということは、私は全然マイナスだと思っていなくて、むしろ極寒・豪雪の青森に来てもらって、温かい心でおもてなしを受けると、そのギャップの部分がきっと武器になるんじゃないかなというふうな考え方を持っています。ですから、是非今日は、パネラーの皆さんもコーディネーターの城本さんも、青森に来ていろいろ青森の温かい心を感じて帰っていただきたいと思っています。

さて私は、このNPO法人を2009年に立ち上げたんですが、そもそもは青年会議所という団体で地域再生や‘まちづくり’というものに携わってきました。まちづくりにはボランティアの方々が多く関わるもので、青森県においてはボランティアをやりたいという人は多く、ありがたいと感じる一方で、ボランティアに無責任な部分も見えるようになったのです。ボランティアの存在を決して否定するものではありませんが、何かお手伝いをしたいという気持ちは分かるのですが、自分から何かやろうとか、そういう気持ちというものに欠けているのかなというふうを感じるようになったのです。例えば、定年退職後にボランティアに参加してみよう。そういう方もたくさんおられますが、我々のジェネレーションにはもっともっと仕事というものと、自分達で事業を組み立てて責任を持って進めようというような行動というものが、地方において必要なんじゃないかと思うようになり、さらには、現在の経済状況も鑑みますと、これは是非とも経済に特化したNPO法人の必要性に至ったわけです。

私が活動の拠点とする青森県弘前市にはたくさんの青年団体があります。ここ数年私はJA青年部だとか、法人会青年部だとか、商工会議所青年部だとか、いろんな青年部の皆さんに声を掛けて、そのネットワークづくりに力を注いできました。繋がることでその地域に対して何か出来るのではないかという理屈ですが、事実多くの成果も上げてきました。NPO法人ECOリパブリック白神という名前の「リパブリック」とは「共和国」という意味であります。白神山地というのは、我々、秋田県と青森県に跨る環境の象徴たる場所でもありますけれども、その地域の繋がりによって、資源を上手く活用してまちづくりに活か

せると考えております。世界自然遺産白神山地の水の恵みにより育まれた食文化とか、生活文化というものを日本国内だけではなくて、世界に発信していく活動がこのつながりによって生まれてくると思うのです。

世界自然遺産といえば、九州鹿児島県に屋久島という世界遺産がございますし、北海道にも知床世界遺産がございます。白神山地も屋久島と同時期の1993年に世界遺産に認定されたんですが、知床は知床財団という機能を市民達が出資し合って持っていますし、鹿児島では県が主導で財団を作っていますが、白神はどうしても市町村、行政区を跨ぐという意味でなかなか手が付けられなかった。そういう財源を持って自然環境を守るというような考えに繋がっていかなかったということがございます。

現在も市町村、行政を跨っているわけですから、なかなか連携が進み難いだろうということで、民間レベルでそういう活動を支援していくべく、白神財団を設立するべく準備を進めております。

地方分権改革という今回のテーマに関しては、私もそういう政治的な言葉というのは非常に苦手ですが、まず地方の時代であるということは感覚としてあります。地方が主権を持って、地方が自信を持って活動していくということは、感覚としては絶対大事だろうと。ですから、そういう意味において、私達が持っている地方の資源とか、産業、精神性、そういうものを含めてどうやって守って次世代に繋いでいかなければならないのかなということを今回考えさせていただきました。

いずれにしても、いろんな繋がりを持って、この地域、地方分権といいますけども、地方地方、自分達の地域だけではなくて、周りも繋がっていくという目線での分権というものを考えなければならぬのかなというふうに思いました。

以上です。

●城本氏

ありがとうございます。

では、続きまして、若菜さん、お願いします。

●若菜氏

岩手から参りました、いわて地域づくり支援センターの若菜と申します。

私は、新花巻駅のすぐ傍なので、新幹線にピュッと乗って、ここの青森まで、初めて新青森駅まで参りまして、近くなったなと思うんですが、実は盛岡で1時間ぐらい待ちまして、でも本当に青森は近くなったなと、今日改めて実感をいたしました。

私達の活動ですが、うちもNPOでして、岩手大学の農学部の廣田先生という先生が立ち上げたNPOでして、廣田先生は、農村計画を専門としていて、いろいろ農山村地域に入って活動をしていました。平成17年にうちのNPOが出来たんですが、きっかけというのは、いろいろ集落、自治体の市町村の方からも相談があったり、地域に住んでいるお爺

ちゃん、お婆ちゃん達から直接いろんな相談が先生の所に寄せられるようになったのが、大体平成12、3年ぐらいからなんです。「何となく自分の集落は元気がないんだけど、どうしたらいいのか分からない」とか、市町村の方からは、「協働というか、住民自らが自分達の地域づくりに取組んでもらいたいんだけど、実際、どうしたら良いのか分からない」と。そのような相談が増えてきて、実際にお手伝いをする、その中でやっぱりこれはしっかり社会ニーズがあるんだからということで、NPOを立ち上げたのが平成17年です。

主に農山村地域の、特に集落規模の地域づくりのお手伝いもしています。300人から500人ぐらいの集落の地域づくりもやりますし、あとは自治会レベル、1,000人とか2,000人レベルの自治会レベルの地域づくりのお手伝いもしております。

うちのNPOの考え方なんです、地域づくりの目標というのは、その地域の実践力を高めるんだということを常に言っています。地域の実践力は何かというと、その地域、地域というのは集落ぐらいの小さい集落とか自治会の小さいレベルで聞いていただければと思うんですが、何か問題があった時に、自分達で解決する力が実践力であると。実践力を高めるには、出来ることからの実践を積み重ねることでは力がつかないということを経験する中で分かりまして、主に「地元学」、岩手では特に「地元学」という言葉があるんですが、住民の方が自分達の集落を歩いて、実際に歩いて回って、その中から自分達でやれること。将来に向けてやるべきことというものを見付け出して、それに出来ることから取り組んでいく。その、本当に後方支援といいますか、私達はそういうような活動を平日頃しております。

本当にニーズがあるなということを感じるんですが、それはやっぱり何んでかなと思うと、やっぱりある程度、もちろん少子高齢化で何となく漠然とした不安というのが現実になってきているのがあるんですが、やっぱりある程度インフラ、道路も整備して、最近では農山村でも携帯も十分出来ていると。光のケーブルも十分きている。「インフラはある程度整ってきたんだけど、何かこれだけでは地域は元気にならないんだな」というのを、地域に住んでいる方が感じているんじゃないかなと。

今までは、何か困ったら市町村の方、凄く今までは丁寧で優しくだったので、何かあったら市町村の職員の方に言っていれば解決出来たのを、でもそれでも解決出来ない問題に直面しているというのもあるかなと思います。

そういった中で、住民自らがやれることというのを実践の積み重ねのお手伝いをしていくわけですが、その中で一番、今日のお話を聞いても感じたことなんです、自分達の集落なりコミュニティの範囲の中に問題を解決する力というのは、やっぱり「住民自治」と言ってしまうんですが、やっぱり住んでいる人が納得出来る次の対策を合意形成する、その体制づくりというのが一番重要であって、実践を積み重ねる中でそれが出来るのが地域の力になっているかなと思います。普通に住んでいる人から見ると、何かうちのお婆ちゃんは困っているとか。うちの嫁さんが困っているとなった時に、誰に相談したらいいかというのが、誰でも分かるような状態になっている。これが、今回の地方分権とい

うのは、私、ちょっとピンとこなくて、むしろ地域主権の方がピンとくるんですけども。自分達の問題に対して、自分達の力で解決出来る。あとちょっとだけ喋らせていただいたんですが、最近、協働が進んでいるまちというのは、市町村のもちろん財政が厳しいのもあるんですが、地域に対しても一定の費用を出して、あと公民館を指定管理者制度にして、地域で職員を雇用してという、進んでいる所はそうなっていますが、ある程度の予算が集落なり自治会にきて、それをどういうふうに配分、何に使っているか。もちろん、貯めることも出来るようなやり方もあるんですが、そういうような所まできていて、地域だけでは難しい所も、私達のようなNPOがサポート出来る。国の予算を使って、私も地域に入ることもあるんですが、国からもそういう「新たな公」とか、「新しい公共」という形で、いろんな、こちらも武器を持てるようになってきていまして、そういう意味では、地域主権づくりというのは、先ほど議論があった国と都道府県と市町村とはもっとローカルな部分では、本当にひしひしと、地域が地域の自治を考えられる体制づくりというのは進んでいるなというふうに感じております。

●城本氏

地域そのものに力がついてきているということかと思いますが。
それでは、最後になりましたが佐々木さん、お願いします。

●佐々木氏

はじめまして、秋田県能代市から来ました佐々木と申します。

NPO法人メリーゴーランドで理事長をしております。

主な活動は、子育て支援で、主体事業は保育園になっています。

私自身は、元々保育の現場で保育士、幼稚園教諭として、ずっと小さいお友達と遊んできたので、今の心境は発表会があつて興奮している子どもの心境です。

結婚を機に、一旦職場を離れて、娘が3歳になって幼稚園に入るのをきっかけに社会復帰を果たしました。いろんな仕事にチャレンジしようかなと思って探してはみたんですが、結局はこういう道に入ってしまった。

自分が子育てを経験して、自分の専門性を活かさないか考えた頃、ちょうどその時期は虐待であったり、自分の子どもを本当に心から可愛いと思えないという親御さんが増えてきた時期でもありました。私も資格は持っていましたけども、やっぱり一対一で自分の子どもを育てるとなると、やはり躓くことも多々あったんですね。そうなった時に、本当に保育のノウハウとか、子どもがどうやって成長していくのか分からないお母さん達は、私以上に絶対に躓くだろうし、もしかしたら、本当に可愛く思えないのも当然だなと。

そういうママ達のサポートをしたいなということで、認可外保育園という施設を作ることにして、仕事を持っている方も、当然、利用は出来るのですが、在宅のお母様達も利用できるような、そういう施設を作りました。それが、平成11年です。

昨年10月にその保育園を認可保育園にしたんですが、約11年間掛かって10年来の夢を達成しました。秋田県内では、NPO法人の運営が初めての認可保育園になります。

11年間、とにかくいろんなことをしてきたのですが、まず保育園の中でお母さん達のサポートもしてきましたし、保育園だけではサポート出来ない所を「つどいの広場」というものを立ち上げて、それを自主事業で運営を始めたり、それが評価されて、市の事業を受託するようになるまでなってきました。

今まで関わる事がなかった行政機関の皆さんであったり、地域活動、本当に子育てと全く関係ない人達とも一緒に手を繋ぎながらここまでやってきたように思えます。今後も、キーワードは「子育て」なんですが、それをやっていきたいと思います。

地方分権に関して思うことは、私もどちらかというと、自分がしたいということを常に目標において、あの手、この手を使ってやってきたので、もしその地方分権になった時に、こんな街にしたいな、こんなことをやりたいなって、多分、その地域地域の特色が出てくるとも1つのプラス効果としてとても魅力ではあるんですけども、逆に地域格差というのがとても不安というか、絶対生じるのかなと。その地域地域の力量で格差が生じるのもやむを得ないかなというところで、まだちょっと外野から眺めているような感じなんです。でも、期待も大きいのかなと。でも、先ほどのお話を聞いて、なかなか難しいのかなと。ここ1、2年ではどうにもならないんだなという話も、先ほどお話を聞きながら感じました。

先ほどのお話にもありましたけども、やはり財政が国も厳しいですし、地元能代も大変厳しい中ですので、まずその財政の所が一番困難なのかなとは思いますが、今、話題になっている「子ども手当」、昨日ホームページを開いたら、またコロッと変わっていたのですが、今度は国が全部負担するんだと。これがまた何日かしたらまた変わったらどうしようと思っているんですが。結局、国で負担出来ない所が地方にしわ寄せでくると、「じゃ、うちは出さないよ」となる。そこでもう既に不公平な環境でお母さん達は子育てをしなきゃいけないという事態が、実際生じてくるわけですね。これが、子ども関連だけではなくて、これから高齢化が進んでいって、そういう施策の所でも、「うちはそこから抜けるよ」となった時に、「自分が老いた時にどうなるんだろう」という不安もあるし、実際、財政が厳しいとそういうことがあるのかなと思うこともあります。

あと、これまでいろんな活動をしていて、なかなか自分が思うようにいかなかったことがあるのですが。まず1つは、地元の小学校が廃校になって、「市民に開放します」ということで活動団体を応募を呼びかけました。その時、広場の環境があまりよろしくなかったので、小学校だったらこれはいいと。設備も当然整っているということで、真っ先に手を挙げたんですけども、学校というのは、用途が変更になるといろいろ難しいことがあるということが、その時、初めて分かったんですね。安易にNPO法人1つの団体に校舎をお貸しすることは出来ない。そういうこともあって、いろんな地方と国と県のそういう裏のしがらみみたいなものも初めて知ることがあって、大変なんだなと思いました。

あと、中心市街地がどこも多分一緒だと思うのですが、シャッターがどんどん閉まってきていて、全然活気がないんですね。いの一番に考えることは、駐車場の確保です。結構、住居だったり商店が建っているので、なかなか駐車場の確保が出来ない。一番いいのは、いつも路駐をしている車道、そこにコインパークでも造るのが、多分、一番いいだろうという案が出るんですけども、結局、歩道だったり、道路の権利が、全部市と県と国、3つに跨っているんで、なかなか一気に進まないだろうということで、折角いい案が出ても実現できないというのが現状にあるんですね。でもやっぱり、駐車場は欲しい！駐車場があると、お客さんは来るんです。

やっぱり東北は車社会なので、車がないとどこにも行けない。そうなると、大きい駐車場がある大型店にどうしても人は流れていってしまう。能代よりも秋田市の方には魅力的なお店がいっぱいあるので、週末は皆さん秋田の方にお買い物に行くと、能代にはなかなかお金が落ちない、そういうマイナスの所がじゅんぐりじゅんぐり回っているんで、そこを何とか解決したいですね。駐車場が駄目だったら何か策を出してくれるんだろうか・・・そういうこともあったりして、なかなか難しいなと思っています。

これから地方分権が進んでいくと、地域があって自治体があってという繋がりが、多分、どんどんどんどん深くなっていくと思うんですが。地域の人が「こういうことをやってみたい」という思いと現状を、同じ一市民として、自分のこととして考えてくれる自治体の職員さんが、これから出てきてくれたらいいなと思っています。

●城本氏

ありがとうございます。

お三方とも、現場で活動されていて、それぞれに具体的なお話をいただきました。

それにしても町長、やっぱり、これ自治体となりますと、今、お話に出たような、いろんな住民の方のニーズであったり要望というのは、かなり多岐に渡ると思うんですが。おっしゃったように、財源に限りがあるという中で、しかも町民の生命・財産をまず最初に守らなきゃならないとなると、なかなかそのへんを要望を汲み上げていくというのは難しいんじゃないですか。

●碓氏

今日も自治体の方が多いと思いますが。私は、今年統一地方選です。これは、北海道の方からこのお話を伺った時に、興部の町長は選挙がないから行ってくださいって言って、「はい」と聞いた途端に新聞に対立候補が出まして、今ここにいる場合ではないんですが、こちらの青森の知事と同じ状況ですけども。

ただ、今言われたように、物事を変えるのは住民のパワーです。8年前に殆ど実は役場の職員も、今日は役場の方もおられると思いますが、財政課以外の隣の課の人は予算を分らないんですね。「それは、私、財政担当していませんから」って始まるんです。予算書渡

しているはずですよ。予算書渡していても、自分の福祉なら福祉の所しか見ないんですよ。殆どそうです。よっぽど熱心だとか、組合活動を頑張っている人ぐらいは分かるんですけども。そうでもない、そうでない、それなりの職員は見ていないんです。住民はもっと知りません。広報出している、新聞に出ても、殆ど知れません。これは北海道だけかもしれませんが。青森の方は違うかもしれないけど、あまり変わらないと思います。

それは、一番分かったのは、選挙だと思う。私が、若僧が、45歳の若僧が町議1期しかやっていないのが、なんせ町は大変だよと、一番喜んで話を聞いてくれたのがお母さん達です。「いや、私、嫁さんに来て30年だか40年経つけど、こんな詳しく町のことを聞かされたの初めてだ」って、涙流して、「こちらこそ、ありがとうございます」と言って、「一票入れてください」って言ったんだけど、入れてくれたかどうか分からないですけども。

実際、そういうことです。殆どが自分に被害があったら言うんですよ。「何で年金、高くなったんだ」とか。「何で水道料上がった」というのは言うんだけど、おそらく地方分権なんて言ったって、例えば、私が今、興部へ帰って選挙戦で「西尾先生に聞いてきた。これから地方に権限が来るんだから、地方分権に私は取組みます」と言ったら落ちます。おそらく、どこの自治体もそうじゃないでしょうか。これが現実でございます。

よろしいですか、1点だけ。

ただ、私、首長になりまして、今道庁と戦っていることが1つあります。今日、道庁の関係者は来ていませんから言いますが、おそらく、青森県もやっているんじゃないかと思うんですが。今、消防無線のデジタル化というものを、今、全国でやろうとしております。皆さん、テレビのデジタル化は今年の7月ですから、何であれ、逆らわないんですかね。お金かけてテレビ買い換えるのに。今、「消防の無線もアナログからデジタル化にしろ」と言うんです。北海道で約750億かかるというんです。それは、誰が決めたかという、消防庁の全国消防長会が決めたんですよ。そして、総務省の訓令で出したんです。通達、いわゆる通達です。

訓令というのは、皆さん、何かと言うと、私が、町長が自分の課の課長に命令するのと同じことなんです。だから、国会議員もおそらく県議会議員の方もあまり知らないんですよ。そして、いよいよになってきた時に、町村長会も市長会も全く知らなかったんです。けども、特に政令指定都市みたいな所は、「タクシー無線が満杯だから、だから消防はデジタル化してください」と。「タクシー無線はアナログで行く」というんですよ。何で民間に行政が負けるんだという話です。

それで「750億のお金を誰が出すんだ」と言ったら、「市町村が負担してくれ」というんです。「市町村に過疎債を貸してやる」というんです。皆さん、過疎債貸すけども、あれは交付税で70%戻ってくるんですけども、だけど借金を返す時は満額返さなきゃいけないですよ。それで計算されますから、ほかの借金が出来なくなっちゃうんです。

で、私は「おかしいだろう」と。「なんで訓令が通って我々町村長が「うん」って言わなきゃならないんだ」と言ったら、道庁は、「基本設計をさせてくれ」と。「なんぼかかるか

分からないから、幾らかかるか分からないから、基本設計をさせてくれ」と。「それはその宝くじのお金でやる」と始まったんです。そしたら、私も性格が悪いものだから、宝くじの方に、いわゆる自治体、我々町村長でやっていますから、聞いたら「そんな話は聞いたことがない」と始まったんです。「コノヤロー」と思って。

総務課長会議をやりました。この中で総務課長いたら怒られますが、総務課長会議もやっぱり、「まず町長、基本設計やってみたらどうですか。じゃないと、750億か500億か分からないでしょう」と。「お前達な、まちづくりやる時に、基本設計やったら議会に対して何と言う」と。次、「実施設計はもう決まっていますから」と言うだろうと。「基本設計やるということは、もうやるということだ」と。「やることを前提に調査なんか何でしなきゃならないんだ」ということを申し上げたら、やると言った町が皆、189市町村あるんですが、皆ひっくり返りまして、今、道庁から目の敵になっているんですけども。目の敵じゃないですよ、知事とは仲がいいですから。

それぐらい、実はどうかかしていると、さっき言われたように、町と住民の間もそうですが、都道府県と我々の間、国と我々の間もそういういろんな縛りで非常に“たが”をはめられてしまっていると。勝手に進められるということがあります。これは、1つの例でございます。

●城本氏

ありがとうございます。

地方分権、今、地域主権と言いますが、いずれにしても、マスメディアにも大変責任があると思っていますが、いわゆる財源が国なのか地方なのかとか。じゃ、その時の権限がどこにあるんだということの議論をするわけですが、今、町長が指摘されたように、私も大事なものは、つまり「自分達のことは自分達で決めるんだ」と。「こういう必要があるからこういうふうにするんだ」ということが、本来の分権といいますか、自治という考え方だと思うんです。

今、いい例を紹介していただいたと思いますが、どうもこの国は、いつの間にかどこかで誰かが決めて、ある日突然、それが降ってくるみたいな話がやたら多くて、というお話だというふうに理解するんですが。

そこで、自治体間の問題はまた後で議論しますが、前半におっしゃった、やっぱり住民が理解してくれないという話ですよ。理解してくれないというか、どうも住民の関心と行政の対応というものが、どうもズレているのではないかという気がするんですが。

若菜さん、どうでしょう。いわば中間支援といいますか、地域の人達とのサポートをされているわけですが、その辺どういうふうに思われますか。

●若菜氏

難しい質問なんです。

市町村行政の、例えば予算配分とかというのは、一住民で答えますと、多分、田舎のお爺ちゃん、お婆ちゃんもそうだと思うんですが、それはやっぱり「選挙で選ばれた議員さんなり、専門家の方が良いようにしてくれるだろう」という、言ってしまうと信頼というか、言ってしまうと無関心なのかもしれませんが。やっぱりそこはあるんじゃないかと思えますよね。

だから、でも、特に田舎の方に行けば、自治会で決まったことは、ある程度は自分達にも責任があるというか、目に見えて責任が、班長が回ってくるとか、自治会費が値上がりするとか。そういう所には各世帯から全員行きますね。

そういうふうに、市町村行政よりも、農山村は特になんですが、もうちょっと身近な自治組織があって、そちらと使い分けといいますか、意識の違いはどうしてもあるのではないかと思いますね。お答えになったかどうか分かりませんが。

●城本氏

要は、やっぱり住民の方にとって、非常に身近な話といいますか、実際にこの自分の生活の利害に関係するようなことには関心が高いんだけど。ちょっとそこから距離があるように一見見えてしまうということがありますよね。

渋谷さん、どうですか。環境エコということから活動されているみたいですが。正直、住民の人達のそういう理解というか、応援みたいなものは感じますか。

●渋谷氏

そうですね。エコという、真っ直ぐ、直球勝負でやると、非常にストイックなカテゴリーと言えばカテゴリーです。この地方分権もそうなんですが、直球で話していくと、非常に難しいし、理解し難い所ってあるかもしれません。ですからちょっと遊びとかを通じて、例えば「自然環境」で言えば、魚釣りが好きな人は絶対に川を汚しませんよね。いつまでも魚釣りしたいですから。そういうような視点で、子ども達にも綺麗な川で魚を釣らせる活動や遊びを通じて、自然環境や地域を愛でる心の育成が必要になってくると思っています。今現在は市民へ問い掛けても、すぐ私達が考えている活動というものに皆々、賛成するわけではないですけども、やはり未来を担う子ども達に、この混沌の時代だからこそ、教育に時間をかけないと駄目だと、やはりそのように思うんです。

●城本氏

そういう広がりといいますか、活動されているとそうなんだろうけども、そういうのが今、周りの一般の方に広がっているというふうにお感じになりますか。

●渋谷氏

私は弘前市が拠点ですけども、やはり市役所の職員が凄く変わってきたという気持ちが

あります。それに触発されて、やはり我々、「住民自治」というカテゴリーになりますが、こういう我々の活動も引っ張られていっているような気がします。

あとは、青森県も統一選挙がありますが、議員の先生方がいっぱい客席に見えて言い難いんですが、次は議会が変わって欲しい。そして議会と行政と住民が上手い具合にいいスパイラル構造をつくってあげればいいと思います。

特に議会なんかは、これから分権ということになると、いろんなローカルルールとか、そういうものを決定していくような機関になるということにおいては、住民達の理解が必要だし、透明度といいますか、もっと開かれたものというものが何か必要なんじゃないかなというふうに感じています。

●城本氏

佐々木さん、さっき、子育ての話は勿論そうですが、小学校の空き教室ですか、あるいは駐車場の問題とか。やっぱり、かなりそれは住民の方達にも直接関わるような問題ですよ。そこがなかなか縦割りで上手くいかないというお話だったんですが、そこはやっぱりかなり壁としてあるんですか。

●佐々木氏

それはありますね。本当に行政と関わるようになって、1つのことをやるのに、幾つ課を回ったらいいんだらうというのが、やっぱりこれまで何度もあったので、「子どもに関する所は1つでまとめてくれたら、こんなに疲れなくて済むのに」という思いはありました。

今回、県の助成金を使ってワークショップをやったのですが、秋田県も少子化が大変な課題の1つなんですね。市民の方、40人ぐらい集めて、要はどうやったら少子化を免れるか。これからどうやって解決していくかというので、最終的に出たのは、雇用の場であったりとか、子育てしやすい環境であったり、子育て直接のことではなくて、生活に関するご意見がいっぱい出てきました。普段、あまり喋らないような人も参加してくれたんですけども。意外と住民の方って、思っていることがとても大きかったり、とても些細なことなんです。それが事業に結び付いていけば、解決出来ることがいっぱいあるんじゃないかなということを感じることが出来たんですね。

NPOは、資金を得るために行政と戦うことも多いんですが、これからはやっぱり地域の人も本当は巻き込んでいくことがとても大切で、「それをやるためには、この課とこの課とこの課に行って、とにかく揉み倒さなきゃいけないんだ」という話をした時に、「そうやって佐々木さんは活動してきたんですね」って、やっとそこで分かってもらったのですが、「これをやりたい」、「はい、どうぞ」ということは絶対あり得ないんだということは、今回分かってもらったというか、良い機会だったと思っているんですけども。

●城本氏

なるほど。国と県、そして市町村、そして皆さんのNPOとこういう、言い方は変ですけども、縦に構造があるとすると、一本にして欲しいという、それはどう。

●佐々木氏

これから、もし地方分権が進んでいくにしても、例えば、子ども省みたいなものがある、子どもに関することは、多分、いろんな分野の課だったりとかが省庁が入ってくるとは思うんですが、そこに行くと全ての省庁の情報が分かるような、そういう仕組みが国だったり県だったり市だったりあると非常に私達は活動がしやすいというか、やっぱり情報収集が大変です。

例えば、「この事業をやりたいという時に、どこでそのお金を出してくれるんだろう」というと、本当に農業関係の方も回ってみることもあるし、本当に今まで踏み込んだことがないような課にも行ってお願いをすることもあるし、「それが駄目だ」というと、また次の、「じゃ、こっちの課はどうだろう」と。不思議なもので、名目が違うだけで、目的が同じようなお金がいろんな所に流れていっているんです。

だから整理すると、もっと簡単にいろんなことが出来るのかなと思うこともあるんですけど。

●城本氏

なるほど。

町長、どうですか。本当は基礎自治体というか、町の単位ぐらいだと、そこをまず上手く調整しながら出来るような気もするんですけど。

●裕氏

1つお話しておかなきゃいけないと思うのは、北海道と青森県の根本的な違いは、まず歴史があって、北海道は青森から、青森で飯食えないから北海道に来て何とか一旗揚げよう、富山から、私の所は富山ですけども、一旗揚げようとした人達。それから強制的に送られた人。国の屯田兵も含めてですけど。そういう方達があまり郷土に愛着なく始まったんですね。さっき言いましたけども、山という所で石炭、鉱山、木材、これを徹底的に収奪いたしました。そして、農業、漁業になったのは、わずか30年ぐらい前だと言ってもいいと思います。それは何故かと言ったら、帰れなかった人がやっているだけです、本州に。未だにやっぱり本州という気持ちがあります。

何故それを申し上げたかという、自治の考え方なんです。おそらく青森は、弘前にしても1,000年、2,000年、1,000年以上の歴史があると思うんですが、北海道は僅か140年ですから。

私、合併の時に申し上げたのは、役所は後で出来たんです。最初に勝手に入って、「ここは俺の所だ」と言って縄張りをして、道庁を騙したりして開拓地を騙したりしてやって、

そこで木を切ったり魚を獲って勝手に売ったわけですね。そこにいろんな、たまたま良いものがあるから、マッチ工場、マッチの軸の工場を造るとか、下駄の工場を造る、あるいは鉱山を掘るとか言って、本州の業者が入ってきて、そこでいさかいが起きるから警察が必要だ。あるいはお金が出てくるから、郵送する場所が必要だ。手紙を送る場所が必要だということで、最初に何が必要、行政で何が必要かという、戸籍と地籍なんです。

だから、本来ここへ戻るかという話ですよ。「福祉はNPO法人にお任せすればいいんじゃないか」とか。「農業は農業協同組合にお願いすればいいんじゃないか」ということが、そこまで考えるのが私は地方分権だと思うんですが。そこへいっていないんです。興部町もおそらく青森市も国を小規模化しただけです。ですから、さっき言ったように、佐々木さんが言われたように、1つの問題で3つぐらいの課が関わってくるんですね。我々も佐々木さんと同じことを実は国に行ってやっているんです。皆さんからの要望を予算化するために、農水省へ行ったり、厚労省へ行ったり、そして最終的に財務省へ行ったり、総務省に行って頭を、各首長さん、議長さん達も頭を下げて、実は同じことをやっている。そしたら「少し腹いせに町民にも少し威張ってやろうかな」というのはあるかもしれない。

全く同じ作業を3段階ぐらいやっているんですよ。これを実は、おそらく西尾先生が言われるのは、「そこを変えなきゃならないでしょう」ということだと思うんです。だけど、日々行政に追われていると、なかなかそれが出来なくて、なかなか気の効いた職員がたまにいればいいんだけど、そうでない職員もたまにいるかもしれないので、そうすると、「私、担当ではありません」みたいなことになります。それと、皆が要望されたことが出来たら、町は潰れますよ。

それともう1つは、町を支えているのは何かということ、何の産業なのかということです。その中で、おそらくここに居られる方が言っていることは、主産業ではないんですね。その問題もあると思います。それ以上は言いませんけども。そういうふうに思っています。

●城本氏

非常に財源というの厳しいということですから、おっしゃる通りだと思うんですが。

それと、まさに産業というか、まずは、はっきり言って、「皆、どうやって食べていくか」ということからやっていかなきゃいけないというふうに思うんですが。それにしても、今おっしゃったように、その度に道庁に行き、国にも行きというのが、相当な無駄だという気はするんですね。そのの枠組みを取っ払うためには、西尾先生も指摘されていましたが、自治体の方がある程度責任を負わなきゃいけないということになると思うんですが。責任を負うという、改革が進めば別ですけども、今の現状で「責任を負え」と言われても、なかなかこれも厳しいということじゃないですか。

●碓氏

当然、よく首長が好きな言葉に“自立”“地域主権”なんてありますが、ということは、

責任があるということですから、今、ご自分の住んでいる町にどれだけの税収があつて、その中で、今言われた、例えば、保育所の問題だとか、福祉の問題だとか、それから環境の問題。それがやれるかどうかということも1回、首長は言うべきですね。うちの町は40億のうち15億しかございません、自主財源。そのうち、半分、職員の給与に半分いっちゃいます、今のままで払えば。残りのお金でやれるかということをもう少し我々が言わなきゃいかんのかなと。そうでないと始まっていかないような気がします。

●城本氏

ありがとうございます。
どうぞ。

●若菜氏

それに関連してなんですが。私も仕事柄、県内の幾つかの市町村に行くんですけども。地域主権、地域づくりとか協働が進んでいる所とそうじゃない所って、結構、最近は格差が、市町村の中で格差が出てきていて、その要因の1つは、お金のない所は凄く進んでいるんです。今おっしゃられたように、やっぱり首長さんなり、行政の方が、このままだと多分5年後やばい。5年後やばい市町村、凄くいっぱいあると思うんですけど。案外、それを、やっぱり首長もある程度自覚していないのか、そうであると、やっぱり今までのように縦割り行政でいってしまうんですけど。本当にお金がない、今、凄く関わっている某市があるんですが、「本当にお金がない」と、「自分の課では出来ないけど、あっちの課だと何とかなるから、ちょっと一緒に行つてあげるよ」と。本当にこういうことが起こっているんですよ。

ある企画の担当、企画、そうじゃなくても、やっぱりある一市役所の職員が、殆どの財政の予算を把握していて、「こっちにないけど、あっちでやろう」とか。「この問題は自分達でお金がないから、あそこと一緒にやろう」とか。凄く知恵を使っているし、その地域の人に対しても、凄く説得をしているし、一緒にやっつていこうと。何か、お金がない所の方が責任感があるというか、そういう感じがします。

だから、お金がないということを嘆いちゃいけないんじゃないかなという気がします。

●城本氏

大変前向きでありますけど。
渋谷さん、どうですか。

●渋谷氏

ちょっと話をそのまま続けると、NPO活動において、例えば大きな予算がついて、急にお金ができると仲間割れになったりすることがあるんですよ。元々はお金も何も無くて、

志だけで集まって掘建て小屋で、あれやろうとかこれやろうとか言っていたのに、急に補助金が入ったら、俺の交通費出せとか、本当にそういう醜い所が出てしまうこともあります。ですからほどほどに、やっぱり補助金とか助成金でも、ほどほどでやる方がいいんだろうなと思っています。大事なのは志です。

●城本氏

やっぱり、どうも首長さんとか行政の方と住民の方というのか、NPOの皆さんの間にちょっと差があるようにも見えるんですけども。おっしゃっていることは、やっぱり自分達でどうやって良くするかということを生懸命考えていかなければいけないし、そのためには、責任が伴うということだと思っんですね。

もう1つは、これは、さっきも議論しましたけども、本当に住民の方達がそれを望んでいるのかというか、あるいは、町長がおっしゃっているように、「本当にこのままでいいのか」というふうな危機感といいますか、そういうものを持っているかという、いささかそれも、あまり感じられないことが多いなという気が正直しているんですけども。きちんと情報を伝えれば、皆さんは分かると思うんですが。例えば、NPOにしても、こういう言い方はあれですが、やっぱり意識が高い方というか、が中心になってやってらっしゃって、多くの方は、「自分の得になるんだったらいいけど、それ以外はあまり関心ないわ」という方が多いような気もするんですが。その辺をどうしていったらいいかというあたりは、佐々木さん、何かお考えはありますか。

●佐々木氏

そうですね、やっぱりNPOは熱い人達の集まりなので、逆に地域の方がなかなか入って来られないような雰囲気もかもし出しているんですけども。多分、皆さん一緒だと思うんですが、取組んでいることというのは、生活に密着していることなので、自分達の活動をしてもらえると、意外と賛同を得ることが出来るというか、それで自分達の暮らしが少し前向きになるのかなとか。意外と巻き込みながらやっていると、どんどん仲間が増えていくという感じなんですけども。

NPOと地域の住民の方って、意外とくっ付きやすいんですが。NPO同士というのが、なかなか難しいのかなと。目的が一緒だと、結構つるみやすいんですが、最終目的は一緒でもテーマが違ったりしていると、なかなか繋がり難い。

例えば、エコのこととか、子育てのことだって、実は、子育てし易い環境という、絶対に自然を大切にしたいという想いが出てきます。でもエコに関しては知識も少ないですし、何でも自分で背負うということは、非常に厳しいです。いろんな知識を詰める頭でもなくなってきたので、出来ればそういう知識を持っている団体さんと手を繋ぎたいし、それが高齢者の方のグループとも繋がることはとても良いことだと思うし、出来れば企業さんとも繋がってエコ活動を地域全体で考える事が出来るようになったら素敵

ですよね。1つの取組みとして、支援者同士が繋がって、お互いの良い所をこれから高め合えるようなチームを作ろうと全県のネットワーク構築を目指し新たにまたNPOを立ち上げたんですけど。

そのようなことをきっかけとして、いろんな所とネットを張っていけたらなと思っています。

●城本氏

やっぱり、新しい繋がりを作っていく方が良いということだと思うんですが。

申し訳ありません、段々時間が迫ってきましたので、これも1つ、どうしてもお聞きしておかなければいけないと思うのは、そういう中で、どういうふうに分権改革を進めるのかとか。あるいは、国なり都道府県なりへの注文ということでも結構ですけど、最後にそれを一言ずつお願い出来ればと思います。

じゃ、また町長からお願いいたします。

●碓氏

首長の立場でいきますと、自分の生活がかかっている人達をまざまざと沢山見るわけです。正直言って、200万ぐらいで家族と生活していかなきゃならないという人が一杯いて、環境も子育ても、それどころでないという人も、実は青森も沢山いるでしょうし、北海道にもいます。その人達の明日の生活をどうするかということも、さっき言いました首長の大きな仕事だと思います。

これ最後ですね。私が実は北海道でご提案しているのは、たまたま、私は酪農家ですので、1つ具体的な話を申し上げます。

去年は、大変暑くて青森もホタテ貝がかなり壊滅的な状態であったということで、大変お見舞い申し上げますが、これは、宮崎の口蹄疫含めて、酪農が、非常に本州の酪農が衰退をしております。従いまして、北海道から釧路港から牛乳の移出といいますが、本州へどんどん、これでもか、これでもかといって送りました。それで、北海道で、実はバター、チーズ等を作れないぐらいな状況で、去年の12月のクリスマスのケーキの無塩バターと生クリームが間に合うか、間に合わないかという、実は国内の状況でした。

それなのに、4円乳価が下がっているんです、手取りの4円50銭、北海道の農家で4円50銭下がっております。飲用向けに送るといことは、加工向けより高いんですけども、それでも経費が大体送るのにキロ20円ぐらい掛かるというお話です。だったら、もう東京に送るのを止めようかなと思うんです。

北海道がホクレンと漁連と北海道庁が手を結べば、中国2億人の富裕層がいるわけです。ここには、日本と同じ値段で売ることが出来る。ただ、ロングライフミルクでないと売れませんが、これは今、北海道の旭川という工場、1か所しかございませんが、そういうことを考えなきゃならない。

何故かという、一部のお金を稼ぐだけでは、もうやっていけないわけでありませぬ。国からの金は減ることは間違いないございませぬ。であれば、私はよく歴史的な話を言うんですが、昔、薩摩がやった密貿易をしなきゃならぬだろうと。だって、自分達が徳川幕府を潰すために何をするかと云ったら、内緒の金を作って武器を調達しなきゃならぬわけです。だったら、さっき言いましたように、本当にお腹が空いたんだったら、青森県と北海道が手を結んで、昔、青森も「十三湊」(トサミナト)と云うんですか、「ジュウサンミナト」と書いて。対外貿易をしていたんですよ。もうずっと昔ですよ。何でこれだけ科学が発達して出来ぬんですかね。日本なんか関係ないじゃないですか。その時に初めて「地方分権」という言葉が、私は出てくるというふうには思っています。

ですから、それぐらいの気持ちをこれからの、僅か私は 4,300 の町の町長ですけども、そういうことをこの地域でやはりネット、まさにネットワークを作って、いかに自分達の町民が食べていける仕事を作っていか。農業、漁業を武器にして、こんなに良いものはないんです。今、中国から来る観光客が粉ミルクを 10 缶とか 20 缶、買って行くんです。ついこの間まで、禁止になりました。それがついこの間、解除となりました。それは、口蹄疫の関係で駄目だということですが、実際には、中国で作っているミルクは、非常に危険なものなので、日本の粉ミルクが飛ぶように売れるんです。魚も売れます。

ですから、こういうものを青森・北海道、東北は持っているんです。何故、関東と東南アジアと同じ土台に上げたら駄目なんでしょうか。私は、そういうことこそ、首長のレベルとしては、自治体の、都道府県のレベルとしては、そういう分権をかざして、そして地域に住んでいる方のいかに収入、そして「地方」と言われぬで、こっちの立派な昔の何とか王国じゃないですけども、そういうまちづくりを進めるために、分権ということがあってしかるべきかなというふうには、ちょっと大きな話をさせていただきましたが、あまり北海道で言うと馬鹿かと言われるので、青森に来て言いましたけども。でも、馬鹿ではございませぬ、と思っております。よろしくお願ひしたいと思ひます。

●城本氏

町長、率直なお話、ありがとうございます。

じゃ続いて、渋谷さんも注文すること、あるいはこういう地域に、地域づくりを進めたらいいというお話があればお願いします。

●渋谷氏

僕もやっぱりお金の話をすれば、同じパイの中で活動していても、限りあるだろうなというふうには感じますので、今、町長が言ったように、世界に目を向けるということは、結構マストだと思っています。

特に昨今、「クールジャパン」という言葉をよく聞くようになりましたけども、外国人がこの日本という国を凄くクールだ、素晴らしいと評価してくれる。それは、東京とか都会

だけじゃないんです。地方の小さい、例えば温泉だったり、食だったり、そういうものに目を向けているんですね。

そういった意味では、やはり我々が実はもっと外国人の目線というか、大きな目線で地域を見る。まちづくりでは、「シンク・グローバリー、アクト・ローカリー」とよく言いますが、大きな目線で自分達の地域を見る目、これが地方分権ということになるのかと思いますし、今日たまたま東北・北海道ですけれども、開発の遅れた場所というものにとどめることなく、周回遅れのトップランナーであるという、僕は最近、そういうふうにも思ってるんです。

是非、今残された自然とか地域文化を活かし、世界に視点を向けた地方のあり方というものを心がけて活動していきたいと思います。

●城本氏

ありがとうございました。

それでは、若菜さん、お願いいたします。

●若菜氏

私が見ている農山村地域では、最近はまだ一自治会がNPO法人になって、交通をやったりとか、介護をやったり、子育てをやったり、いろんな事業をして、自分達の事業費を稼ごうと、そういうふうになってきています。

私がよく言うのは、「市町村が倒れても地域は倒れないように、自分達の食いぶちは自分達でちゃんとやらなきゃいけないんだ」という言い方もしているんですが。地域主権の形は、ローカルな視点で見ると、私は結構明確に見えてきているんですけども。分からないのが、やっぱり市町村とか都道府県、地方分権を実現させて、それが一体どういう姿になるのか。そこは、何か全然描かれていないし、国民にとって分かりづらいんじゃないかって、さっきご質問に答えればよかったなと思ったのが、地方分権というのは、どうしても権限移譲とか事務事業の話のように受け止められて、「それを実現すると、市町村の主権、地域主権、都道府県のレベルでの地域主権というのは、こういうふうになるんだ」というのを誰も分かっていないんじゃないかと。その辺を上手に描いてないんじゃないかなという、まだ描けてないんじゃないかと、正直思うんですけども。その辺を是非、皆さんには描いていただかないと、地方分権というのは、たぶん事務事業のレベルであって、本当に今日の西尾先生のお話を聞いて、そういうことだったんだということが勉強になったんですけども。その辺を描く必要があるのではないかと思うのが1点と。

もう1点なんですが、「協働」についてお話させていただく機会も多くて、その時にも必ず言うんですけども。協働とか、多分、地方分権もそうだと思うんですけども、今まである権限とかだけの話をしている、未来の姿って絶対に描けないんですよ。NPOがこれだけ活躍しているのも、今までの市場とか行政のサービスでは賄いきれなかった問題が出てきたか

ら、新しい対策が出てきて、地方分権が必要なのも、今までの事務事業で出来なかった問題があるからこそ、何か私は必要なんじゃないかと思っています。

だから、新しい問題に対して果敢に地域主権を実現させて解決していくんだという、そういう視点でも何か議論をされる必要があるんじゃないかなというのを1つ感じました。

そうなると、新しい問題が出てくれば、多分、地域もそうですし、地域と市町村と都道府県、国が多分対等な立場で議論が出来るんじゃないかと。対等な立場での議論というものが必要ではないかなと、今日、本当に勉強させていただきました。

●城本氏

ありがとうございます。

じゃ、佐々木さん、お願いします。

●佐々木氏

テレビ等で国会等を見ていると、「何やっているんだ」って、「早く他に何かやることはないのかな」と、いつも思っで見ているんですけども。ああいう状態でポンと地方に何かを任せられたとしても、多分、ここにいらっしゃる方達も「たまったもんじゃないな」っと思うんです。

要は、今度は自分達が地域に住んでいる、そこに住んでいる人達が主役になると考えれば、何か地方分権も楽しめるのかなと思っていますんですけども。詳しいことは何にも地域の人は全然考えていなくて、「そうなるんだ」くらいにしか多分考えていないので、そのマイナス面だったりとか、プラス面だったりとか、自分達に何が振りかかってくるという、まだそこまで考えるような次元ではない。

ただ、私達NPOも「これからは私達が、住民が頑張らないと、この地域は潰れてしまうんだ」ということは、うるさいぐらいに言っているんですけども、そういう中で、秋田だけでは上手くいかないことは、隣の県から力を借りなきゃいけない。

今日、特急で来たんですけども、幸い、新青森駅に停まったんですね。新幹線は見る事が出来なかったんですけども、秋田、特に能代は、皆さんご存知かと思うんですが、やや取り残され感があって、ますます置いてきぼりをくっているんじゃないかなという気がします。陸の孤島と言われている能代で、これからも住民の皆さんと何とか盛り上げていこうという気持ちで一杯なんです。是非いろんな方の力をこれからも借りて、自分達なりに地方分権というものを考えていかなきゃいけないんじゃないかなと思っています。

●城本氏

ありがとうございます。

折角の機会ですので、会場の皆さんからご質問があればお答えいただこうと思っています。

出来ましたらお名前と所属を言っていただければ。

●三上氏

今、県議会でまだ頑張っている三上隆雄と申します。

興部の碓町長さん、私も20年前、相馬村という小さな村の村会議員でありました。そこから県議会を飛び越えて、参議院を経験させていただきました。大変な三段跳びでいったわけですが、今、町長さんのお話を聞いて、今、行政の中間の県議会において、本当に町長さんの言われていること、これをもっと世の中に発信して、地方から国を変えていかなきゃならんという思いを改めて痛感をいたして、感銘をいたしました。

そこで伺いますが、私も参議院1回やって、国会1回、2回目失敗して、今、県議会3期終了するんです。今これで引退しようかと思ったけども、周りの多くの人から、「もう1回、三上やれよ」と。そういうことで改めて決意をして、3日前に選対を立ち上げました。今、こうして来ないで地元で選挙運動をやれば、200、300取れるかもしれないけども、しかし、今日、ここへ来て良かったなと思ったことは、私は地方から発信するという事は、まず私も農家、りんご作りと花作りをやっています。原料に価値を与えるということ、もう少し声を大きくしていかなければならないと。今、県でも国でも、「農業の6次化」ということを言っていますが、6次化にしても、4次化にしても、3次化にしても、原料そのものに価値を与えないと農村は栄えないと、こう思っているんです。

それからもう1つは、現場で働く、働きに価値を与えるということ。

もう1つは、自然に価値を与える。この3つに価値を与えれば、今、地方が抱えている、今日は北海道と北東北3県の貧乏、北海道は貧乏じゃないかもしれないけども、そういう人達、ブロックの人達がたまたま集まりました。もっと地方の声を大きくするという事は、働きに価値を与えること、現場の。それから、原料に価値を与える、自然に価値を与える。この運動を地方から発信して、国の考え方を変えていこうではないかと、敢えてそのことを申し上げたいんです。

その点について、町長さんはいかがお感じをお持ちでしょうか。伺いをいたします。

●碓氏

何か選挙運動のような感じで、三上さん、是非頑張ってください。

私は、まだ53ですけども、三上大先輩に言うのは大変失礼ですが、人間、女性のファッションを見ても大体繰り返すんですね。我々は、やっぱりそれほど特別なことを思いつく人種、動物ではないと思います。やはり、過去にやってきたことを、歴史を学べばいいと思うんです。何で青森であれだけの海外貿易をやれたんでしょうか、昔。で、何故、今出来ないのかということです。

北海道も、過去に例えば、藤原三代というのは、北海道から中国大陸、あるいはロシアから昔は流氷がずっと来ていましたから、その大陸を渡って金が運べたという話もある

ぐらいです。

やっぱり、どうやって生きていくのかということを真剣に考えるのが、僕達の仕事です。それがあって初めて3人の方が言われたことが成り立つんです。「財源はどこにあるんですか」と。じゃ、国にお金がいっぱいあるなら私は言いません。だけど、半分以上が借金ですよ。その国から一体何がくるんですか。くるわけがないです。くるのは請求書、借金の証文だけです。これきます。皆さんの貯金等を見たことはありませんが、同じだかどうかという話ですよ。それでは、やはり先が見えないから、いかに外貨を稼いで、自分達で生活の糧をつくるかと。8年間首長やって考えたら、それしかないだろうと思うんです。

だけど、その材料が、今、三上先輩が言われたように、北海道にも東北にもあるんです。それを何故関東に送らなきゃならないんだと。これは、本来の地方分権だと、私は思います。ペーパーの問題ではなくて、経済できちんとやるということ、そのためには、きちんと港を造らなきゃならないとか、いろんなおそらく戦いになろうと思いますけども、それをきちんとやっていかなきゃならない。それが我々行政に携わる、住民を引っ張っていく立場の人間としては、議会もそうですけども、それが大きな、これからの仕事だと、私は思うので言わせていただきました。

●城本氏

もう時間が迫っておりますので、もうお一方だけ、よろしいですか。
恐縮ですが、簡潔に質問していただけますか。

●荒谷氏

つがる市から来た荒谷と申します。今日は西尾先生とか町長のお話、凄く勉強になりました。

思ったこと、地方分権とは何か。「東京、江戸に戻ることに。地方は地方でいきなさい。頑張りなさい」というエールだと思っています。これから津軽地方で頑張りたいと思っています。その通りだと思います。

●城本氏

よろしいですか。

じゃ、もう一方だけ。よろしいですか。

では、もう時間も過ぎておりますので、これで終了させていただきます。

私も報道の人間として、地方分権について、地域主権ということについても取材し報道してきていますが、今日は本当に町長さんも、お三方も本当に地域で頑張ってもらっているというお話を聞いて、私自身も大変参考になりましたし、正直言って、このところ、地方分権、地域主権改革は足踏み状態で、やや寂しい結果になりそうだなというふうにも思っていたんですが。今日は非常に、これ、まだこれからまだまだ伸びていくというふう

非常に心強くも感じさせていただきました。

つたない司会で、ちょっと時間が足りなくなってしまったことをお詫びします。

それでは、司会の方に。

●司会者

コーディネーターの城本様、及びパネリストの皆様、大変お疲れ様でございました。

皆様、今一度、大きな拍手をお願いいたします。

ここでご出演の皆様はご退席をさせていただきます。

皆様、大変お疲れ様でございました。ありがとうございました。

これで、本日のプログラムは終了いたしました。皆様、長時間にわたりお付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。